

玄奘と『仁王經』について

裴 長 春

はじめに

玄奘がインドへの求法する途中で、高昌国に40日間留り、そのうちに一ヶ月間『仁王經』を講説したことはよく知られている。このことから多くの学者は玄奘と魏文泰との関係について注目している。また、玄奘の西行及び高昌国仏教史に関する研究は玄奘が高昌国で『仁王經』を講説したことに言及した。しかし、それらの研究は、当時の高昌国の社会背景と『仁王經』の護国思想を結びあわせて考察したものである。即ち、高昌国の立場から『仁王經』護国の要求が強調されたのみであると言える。魏文泰や玄奘の時代の『仁王經』の流伝という背景にあまり触られていない。特に、玄奘が『仁王經疏』を講説した状況、更に何を講説したのかまだ十分に考察されていない。本稿では、南朝以来中原及び高昌国における『仁王經』の流伝、また、玄奘が高昌国で講説した『仁王經』の状況について考察する。

1. 南朝中後期から唐初までの『仁王經』の講説状況

南朝の梁の以後、『仁王經』は多く講説されるようになった。特に、王権に頼られた重要な護国会会になった。また、敦煌や西域での『仁王經』の流伝に関する研究には、北魏東陽王元榮、高昌国麴乾固が発願して『仁王經』を書写した写經によく言及されている。

『仁王經』は中原で作られたものなので、高昌国でもその經を崇信したのは、中原から伝えられたからであろう。しかし、『仁王經』が高昌国に伝わった時期や伝播方途などの状況については史料が少ないので、見いだすことが難しい。とはいえ、中原政権に推進されたので、『仁王經』は辺境へと流伝した可能性がある。『統高僧伝・慧乗伝』には、「大業六年（610年）、有勅郡別簡三大德入東都、於四方館仁王行道。別勅乗爲大講主、三日三夜、興諸論道、皆爲折暢、靡不冷然

(T50, 633b)」とある。上記の四方館とは属国からの使者が住むところである¹⁾。当時四方館で仁王行道が行われた原因と「諸蕃酋長畢集洛陽²⁾」との関係があるであろう。属国の使者が隋朝へ参上したので、煬帝の特敕によって「仁王講」が行われた。それは仏教を宣伝する上の政治行為であると言える。高昌王麴伯雅は609年に隋に来朝して612年までに帰国した。故に、610年に四方館での仁王講にも参加したと考えられる。

以上の内容を簡易的に分析すると、貞観三年(629年)に玄奘が西行する前の中原や高昌国では『仁王經』が崇信されたことがわかる。また、当時の高昌国は情勢が極めて不安定なので、麴文泰が玄奘を要請して講説した『仁王經』は理解しにくいわけではない。

そして、唐初の宗教と政治を背景とした玄奘が、『仁王經』を読み込んだことがあるのは当然である。隋に入った後に規模が大きな「百座仁王会」はあまり行われなかったが、『仁王經』が講じられたことは唐初まで続いて継承された。唐初に『仁王經』を講説した論師は、智琰、灌頂、吉藏、慧浄などのような南朝から隋を経て唐に入った大徳である。太宗が即位した後の貞観元年(627年)に、天子の威厳で国を祈る為に天下の僧侶に毎月二回『仁王經』を転読させたという勅がある。また、貞観三年(629年)の勅旨は長安の僧侶に当寺で毎月二七日に『仁王』、『大雲』などの經典を行道して転読させ、それはその後恒例になった(T2110, 511-513)。もちろん、このような勅は僧侶たちの間に『仁王經』の講説を推進したと考えられる。このような背景においては、貞観元年に遊学して長安に戻ってきた玄奘は太宗の勅で僧侶が転読して行道した宗教活動に参加したであろう。つまり、玄奘は西行して高昌国に留まる前に、『仁王經』を習熟して講説できる能力も備えたであろう。

2. 高昌国で玄奘によって講説された『仁王經』

貞観三年(629年)の太宗の勅旨には、当寺で毎月二七日、長安の僧侶に『仁王』を行道させたとある。この勅旨の背景は、貞観二年三月干ばつが起こり、当寺「関内早飢饉となり、民多売子以接衣食」であり、太宗が慈雨のために天下を大赦した³⁾。しかし、僧侶によって經典が転読されても唐の自然災害は避けられなかった。開皇以来の関中で自然災害はしばしば起こったが、ずっと解決されなかったようである⁴⁾。貞観三年に関中で霜にあって飢饉が起きた。太宗は「下勅道俗、逐豊四出(T50, 447c)」という勅旨を出した。同時に、インドで学問を求め

たい玄奘は州僧孝達と共に、機会に乗って長安を離れた。

玄奘は西行して高昌国を経て、高昌王麴文泰に引き止められ、麴文泰の要求で、一ヶ月間駐錫して經典を講説した。これに関する記載は、『統高僧伝・玄奘伝』（以下、「玄奘伝」と呼ぶ）と『大唐慈恩寺三蔵法師伝』（以下、「慈恩伝」と呼ぶ）に見られたが、やや相違がある。「慈恩伝」には、「仍屈停一月講『仁王經』，中間為師營造行服（T50, 225c）」とある。それに対して、「玄奘伝」には「乃為講『仁王』等經及諸機教（T50, 447c）」と記されている。それらの両者を比較すれば、道宣の記載には、玄奘が『仁王經』だけではなく、他の經典も講説したことがわかる。しかし、『仁王經』は二巻しかないため、講説に一ヶ月もかかる必要はない。中原で規模の大きな仁王会はただ7日間のみである。經典を講説した形式から見ると、道宣の記載は確かであろうか。いずれにせよ、玄奘が高昌国で講説した諸經典でもっとも重要だったのは『仁王經』であったと考えられる。また、『仁王經』が講じられたのは、麴文泰の要求からである。「慈恩伝」によると、麴文泰が玄奘に「若当来成仏，願弟子如波斯匿王，頻婆娑羅等與師作外護檀越。（T50, 225c）」と言った。『仁王經』の内容からみれば、波斯匿王が仏教の護者であり、十六国の国王のはじめである。つまり、麴文泰は『仁王經』の内容をすでに熟知していた。

文献史料において玄奘の高昌国で講説した『仁王經』に関する記載はあまり詳しくない。特に、その講説した『仁王經』に関する内容は明らかな記載も見られない。しかし、玄奘が『仁王經』を講説したのは高昌国でだけではない。玄奘の弟子である円測の『仁王經疏』から見れば、円測も聞いたことがあるとわかる。円測『仁王經疏』に記されている玄奘の講説した内容から、高昌国で講説された『仁王經』の内容を間接的に推察することができる。

円測の『仁王經疏』には、玄奘の学説が14箇所引用されている。それらの引用を分析した結果、明らかに『仁王經』に関する箇所が二つある。一つは、「教化品第三」の偈「離達開士勿利王，現形六道千国土。無縁無相第三諦，無無無生無二照。」を解釈したものである。それについては円測の『仁王經疏』に以下の解釈が見られる。

一本記云：上句明境淨，下句明智淨。言無縁者，依他假縁空。無相，分別假相空。第三諦者，眞實性空。解云：除遣三性，存三無性也。言無無者，是無分別性，以體無故；言無生者，依他性空；言無二照者，圓成實性空。然此照言，該通上二。慈恩三蔵云：上句境淨，下句智淨。准同前釋。言無縁者，生無自性性，體即依他。無自在天等，爲縁生故。言無相

者，相無自性性，即所執相，以無自體，爲其性故。言第三諦者，勝義無自性性，眞如爲體，而無所執，真空相故。釋能淨智，准前應知 (T1708, 395b)。

上記の『本記』は真諦『仁王經疏』であるとされる。「上句明境淨，下句明智淨」の「上句」と「下句」は、「無縁無相第三諦」と「無無無生無二照」に対応する。また、円測の注疏では、真諦と玄奘の解釈が引用され、それらの解釈を比較すれば、ほぼ同様な解釈である。ただ、玄奘からの解釈は明らかな新訳唯識の表現が見られている。

もう一つの箇所は、「受持品第七」の「慧雖起滅，以能無生無滅」である。円測による注疏は以下の通りである。

一眞諦三藏立如是義：佛果功德，菩提涅槃，皆無生滅，故通伏難，以三宗義，謂外難云“無間道時，慧有生滅，如何能生無生滅智”，故作此言。金剛時慧，雖有生滅，能證知無生滅理，由斯勝慧，證理深故，此心若滅，便能證得累盡涅槃，亦能證得無生無滅，常住菩提，故前經言：薩云若覺，非有非無，湛然清淨，常住不變，同眞際，等法性。二慈恩三藏作如是說：金剛時慧，雖有生滅，而能證解無生滅理，故能證得果盡涅槃，亦能證得常住法大菩提也。前經所說常住不變者，就勝說故，且說實相，而非觀照 (T1708, 422b)。

円測には、「慧雖起滅，以能無生無滅」についての解釈が二つある。真諦と玄奘の解説である。二人とも「仏果」(涅槃、菩提)は無生無滅である。「金剛時慧」は涅槃や菩提で、無生無滅もできる。しかし、異なるのは、真諦は「金剛時慧」は「仏果」が証得できるならば、その前提は「心滅」である。玄奘はその点を強調していない。

このように、真諦と玄奘の『仁王經』について、ほぼ同様な解釈が見られるが、異なる部分もある。同様な解釈は一箇所目の「慈恩三藏云：上句境淨，下句智淨。準同前釈」である。それに対して、二箇所目の「前經所說常住不變者，就勝說故，且說實相，而非觀照」については、玄奘は真諦の注疏に基づいて更に解釈した。よって、玄奘は円測などの人にも『仁王經』を講説したと考えられる。また、その時期については、玄奘が西行してから長安に戻ってきた後である。円測經疏に引用される玄奘の解釈には明らかな新訳唯識の特徴が見られている。例えば、「無縁無相第三諦」については、玄奘の教理解釈は「生無自性性」，「相無自性性」，「勝義無自性性」である。これらの内容は、玄奘訳『解深密經』，『瑜伽師地論』などの新訳唯識經典に見られる。

もちろん、二箇所の記載だけで、玄奘はインドから長安に戻ってきた後に円測

たちに『仁王經』の内容を全部講説したか否かは判断することはできない。しかし、玄奘は円測たちに『仁王經』にある一部分の内容を講説したことがあるとわかる。こうした中で、ほぼ同様な解釈から見ると、玄奘は真諦『仁王經疏』を参考した可能性があるとわかる。そうしたら、恐らく玄奘が高昌国で講じた『仁王經』も真諦疏を参考したのではないか。

終わりに

『仁王經』は中国撰述經典であるとされる。敦煌及び西域での『仁王經』に関する写經や信仰は中原からの影響を受けたのである。玄奘が西行する前の中原や高昌国でも『仁王經』はすでに流行していた。高昌王麴文泰は護国の為に、玄奘に要請して『仁王經』を講説させた。また、中原で既に読誦して講説したことがある玄奘は講説經典の能力も備えた。更に、玄奘が高昌国で講説した『仁王經』の内容は真諦疏を参考した可能性もある。

-
- 1) 石 (2002).
 - 2) 司馬 (1976, 5649).
 - 3) 司馬 (1976, 6049).
 - 4) 陳 (1963, 146).

〈参考文献〉

- 石曉軍 2002 「隋唐時代の四方館」『東方学』103: 65-79.
司馬光編著 1976 『資治通鑑』全20冊, 中華書局.
陳寅恪 1963 『隋唐制度淵源略論稿』中華書局.

〈キーワード〉 玄奘, 仁王經, 高昌国, 仁王經疏, 円測

(浙江師範大学講師, 博士)